

ダキニ天（辰狐王菩薩）に関する一試論

—日光山輪王寺蔵「伊頭那（飯繩）曼荼羅図」を中心として—

《キーワード》ダキニ天 辰狐王菩薩 稻荷明神 福神

入江多美

はじめに

栃木・日光山輪王寺に、南北朝～室町時代（一四世紀）の制作と考えられる不思議な曼荼羅がある。当寺で「伊頭那曼荼羅図」¹として伝えられてきたこの曼荼羅（以下輪王寺本とする）はこれまで、栃木県立博物館第一〇回企画展「中世下野の仏教美術」²で紹介され、その後、栃木県立博物館調査研究報告書『日光山輪王寺の仏画』³に掲載された（図1）。

しかし総勢五四尊もの多数の多臂尊や狐が登場する輪王寺本が、一体何を表したものなのかはつきりとは分かっておらず、さらに各尊像の側には札銘がついているのだが、札部分の白色（胡粉か）の剥落が激しく、尊銘の判読が困難なものが多いことも、輪王寺本の性格を複雑にしてきた。だが中世に遡り、さらに札銘が書かれる輪王寺本は、中世信仰史上非常に重要な位置を占めると思われる。そこで本稿では、登場する多数の尊像のうち他の中世資料と共通する、辰狐王菩薩とその眷属に焦点を当てて考察したい。なお輪王寺本の

詳細については別稿を用意している。

一、ダキニ天（辰狐王菩薩）に関する文献史料の検討

輪王寺本は、「飯繩曼荼羅図」や「飯綱曼荼羅図」とも呼ばれているが、この名称は、軸裏に「伊頭那本尊 瀧尾山」という墨書銘があることからきていると想像される。「伊頭那」は信州飯繩山の山岳信仰である飯繩権現信仰を想起させるが、輪王寺本を調査した結果、飯繩曼荼羅というよりむしろ、ダキニ天⁴曼荼羅と呼ぶべき様相を呈していることが明らかになった。⁵

画面の中央線上に位置し、大きめに描かれるいくつかの尊像を見てみると、他の尊像には札銘が一枚ずつののに対して、これら大きめの尊像には札銘が二枚ずつついている。これを解読すると、まず画面上部に描かれる、火焰を背負って七頭の狐に騎乗する尊像には、向かって左の札銘に「文殊尊」、右の札銘には梵字と漢字によ

